

18-19 世紀ビルマにおける海上貿易

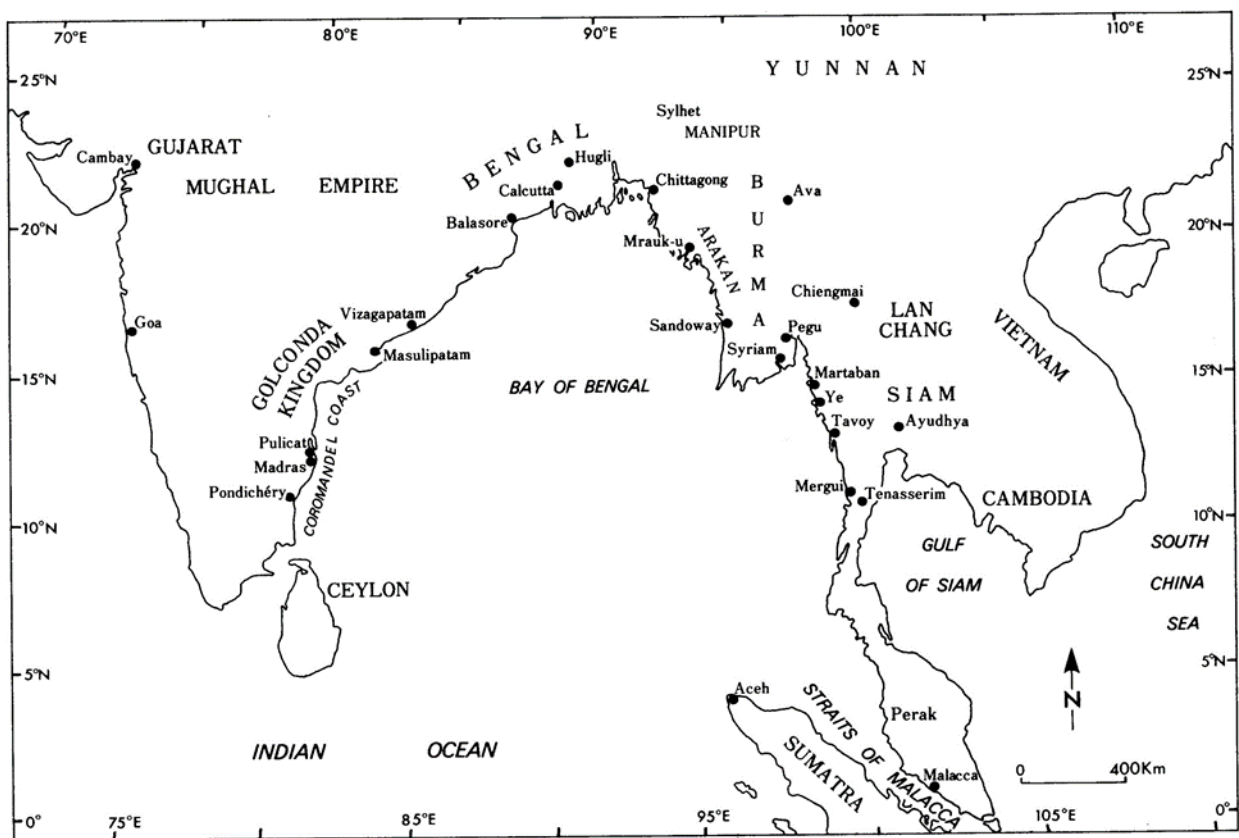
渡邊 佳成

はじめに

18 世紀半ば～19 世紀前半のビルマ海岸部などのベンガル湾北部海域は、インドを拠点とするイギリスやフランスの海上勢力、シヤム湾海域からの中国系商人などの参入によって、経済的にも政治的にも大きく変貌したと言われる。英仏間のインド洋、ベンガル湾における海上覇権をめぐる抗争およびビルマ・タイ間の政治的対立にともなってベンガル湾が「政治の海」と化し、軍艦の新造、修復などの必要性が高まり、造船資材としてのチーク材の需要が高まったこ

となどがすでに指摘されている（渡邊 2003、Ramachandra 1977）が、ビルマの海港における貿易の変遷について具体的な様相は明らかになっていない。

本報告では、イギリスとコンバウン朝ビルマとの間の交渉記録などを渉猟することによって、ベンガル湾周辺におけるヨーロッパ系、インド系などの各商人の活動、貿易品の内容を具体的に明らかにすることによって、貿易構造にどのような変化がおこったのかを見ていくこととしたい。



地図1：ベンガル湾とビルマ（Lieberman 1984: xiv Map1より）

1. 前史 (17-18 世紀前半)

1-1. オランダ東インド会社の活動 (17 世紀)

18 世紀半ば以降の変化を見ていくためにもそれ以前の時代のビルマにおける海上貿易の様相について、簡単に見ておく必要がある。

オランダ東インド会社が 1634 年に、イギリス東インド会社が 1647 年に、ともにシリアムに商館を開設したがその後すぐに閉鎖を余儀なくされたので、ビルマにおける貿易はあまり振るわなかったと考えられていた (Hall 1968 (1931); 荻原弘明 1982, 86)。また、当時のタウンゲー朝ビルマの都が内陸のアヴァにあったこともあって、交易の時代の東南アジアにおいて、17 世紀ビルマの海上貿易はあまり注目されることがなかった。

しかし、オランダ東インド会社の未公文書を用いた Dijk の研究によって、17 世紀のビルマにおいても活発な海上貿易が行われていたことが明らかになった (Dijk 2006)。以下、Dijk の研究にもとづいて、簡単に当時の状況について概観していきたい。

オランダ東インド会社は 1634 年から 1679 年まで毎年、平均 2 隻 (多いときで 3 隻) の船をコロマンデル海岸のマスリパトナム、プリカットからシリアムに派遣して、一貫して利益を得ていた。そして、オランダ東インド会社のビルマからの撤退は、貿易の不振が理由ではなく、ビルマ貿易で得た利益や貿易品を会社のアジア貿易に投入しさらなる利益を得ていたオランダ東インド会社が、貿易から植民地支配に比重を移していった構造変化に対応するものであったことが明らかになった (Dijk 2006: 5-6, 119-120,

196-200)。

この間行われた貿易は、インドからインド木綿 (奢侈品ではなく日用品中心) がもたらされ、ビルマからは、ラック、錫、ガンザ ganza¹、中国の銅銭、象牙、長胡椒、蜜蝋、金などが輸出されたが、この時点では木材 (厚板、マスト) は主要な商品ではなかった (Dijk 2006: 115-117: Appendix I, V)。

オランダによって行われた貿易の商品構成は、ライバルであった、インドのムスリム商人、ヒンドゥー商人、アルメニア商人やヨーロッパ勢力のポルトガル商人、イギリス東インド会社などの貿易でも変わらず、同様の貿易が行われていた。インド商人は船隻数 (大きさは不明) ではオランダを圧倒し、多いときには年間 9 隻もの船がビルマを訪れていたし、インド綿布の貿易でも、価格、品質の点でオランダを圧倒していたようである。一方、イギリス東インド会社は、私貿易商人やオランダの成功を見て 1647 年にビルマ在住のムスリム商人の協力を得てシリアムに商館を開設したが、オランダの妨害や資金不足によって 10 年後には商館の閉鎖を余儀なくされたが、その後も私商人の活動は活発であったようである (Dijk 2006: 146-168)。

1-2. 18 世紀初頭のベンガル湾

オランダがビルマから撤退したあとの海上貿易は、その後も同様の貿易がインド商人、ポルトガル人などによって続けられたと思われるが、史料がなくよくわからない。

17 世紀末から 18 世紀初にかけてインドから東南アジアの海域で活動していた私掠船の船長で

¹ 銅と鉛の合金で、17 世紀のビルマでは貨幣として使用されていた。

あり商人でもあったハミルトンの記述が残されており、1709年頃に収集したビルマの海岸部の情報がまとめられている。それによると、ビルマの海岸では、シリアムがアルメニア人、ポルトガル人、インド人（ムスリム、ヒンドゥー）、およびいくらかのイギリス人との貿易で繁栄しており、年間20隻ほどの船が訪れていることが伝えられている。貿易品は、17世紀の商品構成とは若干の変化をしており、主な輸入品は、ベンガル、コロマンデル海岸製の綿布に加えて、銀がもたらされており、輸出品は、木材（建築資材）、象、象牙、蜜蝋、スティック・ラック、鉄、錫、石油、ルビーなどで、ガンザ、中国の銅銭、金などが姿を消している。輸出品のうち、ルビーは王室貿易の対象で、その代理としてアルメニア商人が独占的な取引を行っていた。また、豊富な硝石も注目されているが、禁輸品となっていた（Hamilton 1744 (1727) II:39-42）。

2. インド洋における英仏の抗争

～ビルマの地政学的意義の増大 18世紀半ば

そうした中で、18世紀の20年代になると、ヨーロッパにおける英仏の第二次百年戦争の対立がインドをめぐる植民地競争にも波及し、インド洋の海上覇権をめぐる抗争が激しくなっていた。インド洋の西海域においては、レユニオン島およびIsle de France（モーリシャス）に拠点を持つフランスが優位に立っていたが、その優位をさらに確固たるものにするためにインド洋東部海域における拠点の確保をめざしてビルマの海岸部に目を向けていった。一方、西海域において劣勢に立っていたイギリスはそれを挽

回するためにも、ベンガル湾における覇権の確保に躍起になっていた。

1729年、かねてよりビルマのチークに注目しビルマの海港に造船所を建設することをフランス政府に進言していたデュプレクス Joseph François Dupleix（後に仏領インド総督

（1742.1.14-1754.10.15））は、シリアムに造船所を開設しポンディシェリに船を供給しベンガル湾東部におけるフランス海軍の拠点の確保に乗り出した。一方、イギリス東インド会社も1730年から40年にかけて、シリアムで少なくとも6隻の船を建造するなどベンガル湾東部の重要性を認識しビルマにおける拠点の確保に努力していた。

ビルマおよびベンガル湾東部の地政学的意義が増大していく中、ビルマ国内では大きな政治的変動が始まっていた。下ビルマ海岸部を中心とした勢力が内陸部上ビルマの支配に反旗を翻し、1740年には下ビルマの中心的都市ペゲー（バゴー）を、1743年までにその他のシリアム、ダウエー、マルタバンなどの海港を占領し、1751-52年には上ビルマの王都アヴァを占領し、第二次タウングー朝は滅びることとなった。これに対して上ビルマ、シュエボーのアラウンパヤーの勢力が反攻を開始し、新たな王朝コンバウン朝を創始し上ビルマを奪回した後、下ビルマの再統合を進めていき、1756-57年には、シリアムを奪回、ペゲーを占領し、ようやく国内の統一が達成される。この間、シリアムの対岸のダゴン（闘いの終焉の意）（英語名はラングーン）と改称され、その後の下ビルマ統治の中心および海港として繁栄することになる。

ビルマの混乱を見た英仏の対応は対照的であった。フランスはデュプレクスの主導のもと、下ビルマ勢力を援助することを決定し、ブルノ the Sieur de Bruno を派遣しシリアムの要塞化を援助し、1742年に一旦放棄していたドックを再建するなど、ビルマの海岸部における確固たる地歩を占めることを目指した。一方、イギリスはこうしたフランスの動きに神経を尖らせつつも態度を決めきれず、海岸部でははずれに当たるデルタ西部のネグレ島に商館を建設しつつ、上ビルマ、下ビルマの両勢力にそれぞれ使者を派遣するなど両面外交を展開し中立を維持しようとした。

ビルマ海岸部に拠点を確認しようという英仏の動きは、アラウンパヤーとその後継者たちによるビルマの再統一と下ビルマ支配の再確立によって、ともに頓挫することとなる。フランスは、シリアム、ペギー攻防戦の中で敗退した下ビルマ勢力とともにアラウンパヤー軍の捕虜となり多くが処刑され、ビルマとの繋がりを失ってしまうとともに、本国の指示によりビルマの政争に関わることを禁じられてしまう。一方、イギリスもどちらつかずの対応をアラウンパヤーに咎められ、ビルマ軍によるネグレの虐殺事件（1759.10）を招くことになり、ビルマからの一時的撤退を余儀なくされる（Hall 1960(1950):

79-86）。

この間、イギリス、フランスなどの貿易活動は停滞を余儀なくされたが、アルメニア人、ポルトガル人、インド人（ムスリム、ヒンドゥー）などによる貿易は続いていたようである。そのことは、当時、イギリスが下ビルマ勢力、アラウンパヤーの勢力と接触を持つ際に、その仲介役として、アルメニア人、インド人ムスリム、ポルトガル人などが様々な立場から介在し²、手紙のやりとりもビルマに赴いたオランダ船などが仲介していたことから明らかである。ただ、貿易の詳細は不明であって、ビルマの産物として、金、銀、鉄、錫、銅、鉛、象牙、胡椒少量、カルダモン、麝香、ラック、宝石、象、カテキューcatechu³、蜜蝋、石油、桐油、大量の棉花、絹、硝石などをイギリス側が認識していたことのみが知られる程度であった（Dalrymple1808: 109 : Letter concerning the Negrais Expedition; and concerning the adjacent Countries (23rd June, 1759)）。

3. フランスの亡霊とイギリスの積極的関与 ～ビルマ貿易の重要性 18世紀末

3-1. 1782頃の貿易

1760年代、70年代における貿易についても同様の状況が続いていたと思われる。そのこと

² 例えば、アラウンパヤーの使者、交渉役の一人であったアルメニア人のグレゴリーGregory はダゴンのシャーバンダルであったし（Captain George Baker's Journal of a Joint Embassy to the King of the Bûrghmahns [Burmans]:153-154 ; Symes 1995: 57）、ポルトガル人のアントニオ Antonio はバセインの太守であった（Alves, Walter. "Account of the Settlement at Negrais, being cut off." [Dated 22 November 1760]: 344, 355）。イギリスがマドラスから使節を派遣する際にも、ナーガパットナムからペギーに向かうオランダ船にその旨を託して事前通告していた（Alves, Walter "Account of the Settlement at Negrais" [Dated 22 November 1760]: 351）。マドラス知事からビルマ王への親書も英語からポルトガル語そしてビルマ語に翻訳、もしくはポルトガル語からベルシア語そしてビルマ語に翻訳されていた（Ensign Robert Lester's Proceedings on an Embassy to the King of Ava, Pegu, &c.: 209 ; Alves, Walter "Account of the Settlement at Negrais" [Dated 22 November 1760]: 373）。

³ ビルマ阿仙薬、カッチ catch とも言う。アカシアの一種の *Senegalia catechu*（和名：アセンヤクノキ・ペグノキ）の芯材から採取され、褐色の染料、皮なめし剤、薬剤として用いられる。

は、1782年にベンガルから南インドに向けて航海していた東インド会社の船がマストの損壊により修理のためにシリアムに寄港することを余儀なくされた際に集められた情報から、明らかである。同年の8月から9月にかけて情報を収集した軍医ハンターによれば、イギリス東インド会社とビルマとの貿易は限定的で、数人の私貿易商人が、アンダマン諸島で仕入れたココナツをビルマにもたらし、その見返りとして木材を手に入れ、ベンガルやコロマンデル海岸で大きな利益を得ているにすぎないという程度であったようである (Hunter 1785: ii)。これらの情報は、彼の直接の見聞とともに、ヒンドウスタン語に堪能な現地の人々および現地に長らく滞在しているさまざまな国出身の外国人より得ている (Hunter 1785: v-vi) ことから、ビルマにおける貿易は以前同様、アルメニア人、インド人 (ムスリム、ヒンドゥー教徒)、ポルトガル人により行われていたことがわかる。

また、ラングーンの造船について、もともとは捕虜として連れてこられたシャム人の船大工より技術を継承した造船技術は優秀で (Hunter 1785: 14)、修理に訪れるヨーロッパ船も多く、ビルマ人所有の船もここで建造され、水夫も当地の人々でインド各地を往来しているとハンターが述べていることから、私貿易商人やオランダ船、ポルトガル船、フランス船などが当地を訪れており、またビルマ船もベンガルやコロマンデル海岸を訪れ貿易に従事していたことがわかる (Hunter 1785: 46-47)。

その貿易で注目されるのは、チーク材が大きく取り上げられている点である。ビルマを訪れるヨーロッパ人の主たる目的はチーク材となっ

ており、インドのどこよりも豊富に存在し価格も安価で、家具のみならず、船の建材として最適であると高く評価されていた。ただ、その堅牢性については、ボンベイ周辺産のチーク材に劣るとも考えられていた。その他の商品としては、錫、蜜蝋などが豊富とされていた。また、金や硝石も豊富であるが王朝政府によって輸出禁止とされていた (Hunter 1785: 46-47; 51-52)。

しかし貿易のさらなる発展を阻むものとして、港での手続きが煩雑で屈辱的なものであったことが同時に挙げられている。ラングーン港に到着した船は艦載の大砲や舵の陸揚げを要求され取引の終了まで返還されなかったし、船に搭載されている武器、商品のリストの提出も命じられていた。ビルマ政府の貿易に対する消極的姿勢の背景にはインドにおけるヨーロッパ諸勢力の侵略的活動に対する警戒感があったとされており、そうした警戒心をあおるものとして東インド会社の活動をできるだけ抑制したいと考えるビルマ在住のアルメニア人、インド人などの存在が強く意識されていた (Hunter 1785: 55-56)。

こうした状況を把握した上で、ハンターは、ビルマ貿易の将来性について、インドのコモリン岬以東でビルマが唯一のチーク材の安定的な供給地であり、ベンガル湾における海戦 (対フランス) が発生した際にも素早く効果的に後方支援できる地としても重要であると指摘している。そして、そのためにもラングーンに会社の代理人の駐在が肝要であると結論づけている (Hunter 1785: 58-60)。

こうした状況は、1783年から1806年までビルマで布教活動をしたサンジェルマノ神父の記述

からもうかがえる。記述内容の時期の特定は難しく、後述する 1790 年代の状況を述べている可能性もあるが、ラングーン港における貿易が、ビルマ人だけでなく、当地に滞在する多くのムスリム商人、いくらかのアルメニア人、少数のイギリス人、フランス人、ポルトガル人などによって行われていること、ラングーンの輸入品で高い利益を上げているのが砂糖、ベンガル木綿、マドラス木綿などの綿布であったこと、ベンガル、コロマンデル海岸、フランス島（モーリシャス）など西方に向けての輸出ではチーク材（マスト、厚板）が圧倒的に多くインドからやって来るさまざまな国の船の求める商品となっており、住居、特に船の建材として需要が高いこと、一部はラングーンでの造船も行われていること、貿易船には武器、舵などの陸揚げが要求されることなどが記されている。

（Sangermano 1995 (1893): 217-220）、ハンターの集めた情報が確かなことが確認できる。

3-2. フランス勢力の排除と貿易の拡大

～18 世紀末

チーク材への注目が高まる中、1790 年代までにはその貿易量は大きく拡大したようで、それにもない、かねてより問題視されていた貿易をめぐるさまざまな苦情がイギリス東インド会社のベンガル当局に寄せられるようになったことが以下の記録からうかがえる。

カルカッタ、マドラスとラングーン間の貿易は近年急激に増加し、国家的重要性を帯びてきた。特にアヴァとペグーの産物であるチーク材のために。そして、カルカッタとマドラスは造船やその他の様々な目的に用いる木材のす

べての供給をそこから受けている。……ラングーン港における不正行為や圧制について苦情を述べた陳情が、何度も、私商人や水夫たちから参事に提出された（Symes 1995: 121）

一方、1785 年のコンバウン朝のボードーパヤーによるアラカン王国征服により、ビルマはベンガル地方に勢力を築きつつあったイギリスとの間に様々な摩擦を引き起こしていた。特に、アラカン王国滅亡後イギリス領に逃れた集団がそこを根拠地にビルマの支配を覆そうとする試みをしばしば起こしたことによって、両者の関係は悪化していった。このアラカン人集団の問題を逆に契機として、ベンガル当局は、1795 年 2 にサイムズ使節をコンバウン朝の都アマラープラに派遣し、同時に、他の重要関心事についても解決しようとした。

その一つは、ビルマからのフランス勢力の排除にあった。1750 年代とは違って、インド大陸におけるフランスの勢力は取るに足りない存在となっていたが、海上においては、モーリシャスを基地とするフランスが圧倒的な優位を占め、イギリス商船は大きな被害を被っていた。そのフランスが再び下ビルマに拠点を築き上げるということは、ベンガル湾が完全にフランスの内海と化すことを意味し、イギリス東洋貿易の崩壊につながるものであった。それ故、ベンガル政府にとっては、そうしたフランスの進出を抑え、ビルマさらにはベンガル湾からフランス勢力を排除することが依然として重要な課題の一つであった。そして、第二の目的として、当時発展しつつあったビルマとの貿易の地歩を築き上げることに、重点が置かれていた。こうした当局の意図は、サイムズの

こうした関心は三つの異なる対象に向けられている。第一は、造船のための木材の定期的な供給を確保することであり、それなくしては、インドのイギリス海軍は非常に収縮した規模でしか存在し得ない。第二には、できるかぎり我々の産品をその国に導入し、さらには、その河を經由して中国の南西部に市場を見いだすよう努力することである。第三は、貿易を他のルートに移管させ、かつ、我々の領土の首都（カルカッタ）に非常に近接する国に永久的な植民地を獲得せんとして為される外国勢力のすべての侵略、接近から [ビルマを] 守ることである。この最後の考慮こそ、すべてに超越することは言うまでもないことである (Symes 1995: 456)

という記述からも明らかで、特に外国勢力（フランス）の動きに神経質になっていたことがわかる。サイムズ使節の結果、ラングーンに駐在することを認められたレジデントのコックスは、1796年の10月から1797年の7月の駐在期間中に収集した情報をもとに当時のラングーンにおける貿易について詳細な記述を残している。

ビルマの対外貿易の収支について、フランクリンはコックスの情報に基づいて、以下のような概観を残している。ビルマ側には記録は残っておらず、その数値の正確性については確認することができないが、当時の貿易全体の概要を知る上で重要な記述である。

○輸入

ラングーンおよびバセインにおける海上貿易による輸入（単位：ティカル *tecals*）

ベンガルから（現地産の物品）	----347,255
マドラスなどから	-----58,450
中国から ⁴	-----
	11,050
マラバル海岸から	-----5,800
マレー半島などから	-----92,750
ニコバル諸島から	-----56,250
ヨーロッパから ⁵	-----333,620
その他（ベンガルから）	-----94,825
合計	-----1,000,000
	（ラングーンにおける関税からの推計値）
密輸（推計）	-----200,000
アラカン経由のビルマ人による貿易	
ベンガルからラングーンへ	
40隻 × 4,000 <i>Tecals</i>	-----160,000
ベンガルからアラカンへ（陸路および河川で上ビルマへ）	50隻 -----200,000
海上貿易による輸入の総額	-----1,560,000

○輸出	
ラングーン、バセインから	-----700,000
同（ビルマ人による）	-----20,000
アラカンから（ビルマ人による）	----40,000
海上貿易による輸出総額	-----760,000

○海上貿易の収支	-----800,000
○中国との陸路貿易（雲南経由）による黒字	----
	400,000
	（残りの 400,000 <i>Tecals</i> が実質的なビルマ側の赤字＝禁輸となっている銀の流出が起きていると思われる）（ <i>Francklin 1811: 100-102</i> ）

⁴ 中国からの船ではなく、ペナン、マレー半島などからの船がもたらした中国産品のことと思われる。

⁵ これもヨーロッパからの直接の船ではなく、インド各地からもたらされたヨーロッパの産品のことと思われる。

どの商人がどの貿易にどの程度関わっていたかは不明であるが、海上貿易の57%がインド方面（「ヨーロッパからの輸入」も含めて）からの輸入で、密輸やビルマ人による輸入が36%、残り7%弱がマレー諸島などからの輸入であったことがわかる。

その商品構成は、金額ベースで、カルカッタからの輸入の8割弱が綿布、マドラスからは100%綿布、ヨーロッパ製品の6割がイギリスの毛織物ブロードクロス、中国製品の内8割弱が陶磁器（日用品）、マレー半島からの7割がビンロウ、ニコバル諸島からは100%ココナツであった。密輸およびビルマ人による貿易を除けば、全体の33.2%がインド綿布、19.4%がブロードクロス、6.4%が陶磁器、6.4%がビンロウ、6%がヨーロッパ製船具・艀装品、5.6%がココナツとなっていた（Francklin 1811: 110-113）。

一方ビルマからの輸出は、金額ベースで、ラングーンで造船された船舶が半分近くを占め、全体の51.4%、次いで多いのが、各種のチーク材で19.6%、ラックが12.9%を占めていた。そのほか、象牙4.3%、各種宝石3.8%、カテキュー1.9%、錫1.4%、蜜蝋1.3%であった。この数値からわかるとおり、1790年代半ばには、船隻とチーク材がラングーンの上陸貿易による輸出の7割を占めていたことがわかる。

これは、チーク材の価格が最大でインドでの半額、最高品質のボンベイ製がベンガル製の約1.18から1.25倍、ラングーンはベンガルの0.7~0.75倍の費用という造船価格の安さ⁶（Francklin 1811: 34-35, 36-44, 47-50）もあったが、当時の記録にしばしば言及されているように、米、銀、硝石、鉛などは輸出禁止、ルビー、象牙なども王室による独占もしくは輸出禁止、綿花は主に陸路中国へ輸出されていたため

（Francklin 1811: 50-51, 52-59, 61-62, 72-74, 76-77, 87-89）、輸出はチーク材、船舶に頼らざるを得なかった側面がある。

ビルマ人による貿易は、大きく分けて二つのグループに分けることができ、一つはラングーン、バセインなどからアラカン海岸を経てカルカッタへ行く1000~1500マウンド maund⁷の積載量、水夫20~25人の船が年間40~50隻、もう一つは上ビルマの商人たちが仕立てる船隻で陸路でアラカンへ行きそこから500マウンドの積載量の船が年間40~50隻である。ともに、おもな積み荷は本来禁止されている銀で、そのほかに、ラック、銅（中国産）、カテキュー（カッチ）、象牙、蜜蝋などをカルカッタにもたらし、帰りの積み荷の半分はビンロウであった。ベンガルのラキプール産のビンロウは人気が高く、マレー産のビンロウの3倍の価格であった。そのほか各種の綿布が輸入品の半分近くを占めていた。ビルマ商人は、イギリスをはじめとする外国商人に課せられる港湾税などの諸経費が免除、もしくは税逃れをした結果、同じ商品でも外国商人の半分の価格で売ることができるものもあったといわれており、イギリスのラングーン貿易を危うくする存在であると評価されていた（Francklin 1811: 94-99）。

これらサイムズやコックス、サンジェルマノなどの情報を総合すると、1790年代半ばには、ビルマの海上貿易は大きく拡大し、その商品構成も、ラック、カテキュー、蜜蝋など従来の産物に加えて、輸出はチーク材およびビルマ製の船舶が大宗を占めるようになり、特にラングーンで建造された船舶が目につくようになっているが、これは、禁輸品が多く貿

⁶ パナンの造船価格（1807）はビルマの3倍であるとの報告もある（Francklin 1811: 48-49）。

⁷ 1maundは1760頃のベンガルでは75 lb.、コロマンデルでは25 lb.（Hobson-Jobson: 563-564）。

易で得た利益をつぎ込むべきめばしい商品が多くなかったこともその理由として挙げられている (Francklin 1811: 34-35, 36-44; Sangermano 1995 (1893): 220)。一方、輸入は、従来同様、インド綿布が多くを占めるが、イギリスのブロードクロスも目につくようになっており、また、造船との関連でヨーロッパ製の船具も一定程度の割合を占めるようになっていたことが注目される (Symes 1995: 460-462; Francklin 1811: 110-113; Sangermano 1995 (1893): 218)。

むすびにかえて

～市場としてのビルマ 19世紀初

18世紀末の貿易拡大と商品構成の変化は、19世紀に入ってから加速していく。造船についても、1786年以来、横帆式の船が作られるようになり、38年間で111隻のヨーロッパ式の船が建造されており、その中には800～1000トンを搭載できる船も建造されていて、ヨーロッパ式の造船技術という点でもインドの他の港よりも優位に立つようになっていた (Crawfurd 1834 II: 57)。

1811年にインドにおけるフランス領、オランダ領の多くがイギリスの支配下に入り、私掠船の活動が沈静化した結果、ラングーン港を訪れる貿易船も飛躍的に増加していった。1811年以前は年間18～25隻のヨーロッパ船がラングーン訪れていたのが、1811年には35、36隻、1817年から1822年には、年間平均40隻、1822年には56隻と急増していった。

綿布の輸入額も、1811年以前が34万ティカル、1811年から1816年は平均76万ティカル、1817年から1822年は平均153万ティカル、1822年には225万ティカルと、過去12年間で貿易額は5～6倍に増加している。そして、1817年～1822年には、それまでベンガルやコロマンデルなどインド産が主体であったものが、大部分がイギリス産のものとなるという、産地の変化も起こっている (Crawfurd 1834 II: 197-199)⁸。

こうした貿易量の拡大とイギリス産の綿布の登場は、1822年からラングーンに駐在して綿布の貿易に従事していたイギリス商人ゴウガーの以下の記述からも明らかである。彼は、ベンガルからマンチェスター、グラスゴー産の綿製品を輸入し2.7倍の利益を生み出したが、その利益をビルマから持ち出す際に、米、金銀などの貴金属、馬、美しい大理石、中国からの絹などが輸出禁止となっているため、チーク材の輸出のみでは収支バランスが取れないことを嘆いているが、同時に、将来的に米の輸出が解禁になることを願っていた (Gouger 1860: 60-67)。

コンバウン朝ビルマの勢力拡大にともない、アラカン問題と同様の問題がアッサムやマニプル方面でも起こると、両者の国境に関する考え方の違いが鮮明になり、第一次英緬戦争 (1824-26) の衝突に発展していったが、2年間近くの戦闘に敗北したコンバウン朝は、アラカン地方、マレー半島のテナセリム地方の割譲を余儀なくされ、貿易をめぐる摩擦の解消も強く要求されるようになる。1826年9月30日、王都アヴァに

⁸ ターラーワディ王子の商業代理人で王子の封地のチークを独占的に扱っているイギリス商人レアード John Laird も1821～22年頃から急速にイギリス製の綿製品が拡大し、マドラス製の綿製品は衰退していったと述べている (Crawfurd 1834 II: appendix no.X: 78)。

到着したクローファードは、通商条約の交渉に入り、五項目からなる要求を提示する。すなわち、1. イギリス商人に交易の自由を与えること、2. 金銀の輸出を許可すること、3. 港湾税を船の大きさに従って決定すること、4. 商人に移動の自由を与え、彼らが国を去る時には、その財産、家族を連れ帰ることを許可すること、5. 難破船には救助、保護を与え、元の持ち主に返却することを要求し (Crawford 1834: I: 181-193, 207-216, 308-316)、十数回の会談の後、金銀の輸出、家族の連れ出しについては拒否されるが、11月24日、以下のような内容を持つ通商条約を結ぶことに成功する (Crawford 1834: II: 446-450, KBZ II: 422-24)。

第1条：両国政府は船舶が港に入り交易することを許可し、可能な限り保護を与えること、税に関しては上陸場における通例の税以外は課さない

第2条：船幅が8キュービット以内の船舶は、何れの商人に属そうとも、関税と通行料以外の請求に応じる必要がない

第3条：商人の帰国について、その財産の持ち出しを認め、また、その帰国のルートについても、商人の望む地域を通過することが許される

第4条：難破船の返還に関する規定

こうした通商条約をめぐる交渉は、先に述べたイギリス商人たちの要望に応えようとしたものであった。ベンガル政府は、官報で次のように述べている。

その国の資源は完全に我々の自由になり、その国との貿易は英領インドにとって、そしてイギリスにとっても最も重要な対象と

なるだろう。…… (中略) ……イギリス綿製品の貿易は最近非常に増加し、一方、マドラス綿製品はそれに反比例して減少した (Wilson 1827: Appendix No. 22: From the Calcutta Government Gazette, July 3, 1826)

また、クローファード自身も、通商条約を評価して、

第1条は、…… (中略) ……公的な文書による正規の手続きによって、今までは黙許によってのみ存在したイギリス商業の足場を確保しただろう。第2条によって、積載力50トン以下のすべてのイギリス船はトン税と入港税の支払いを免れ、ここに、ビルマ帝国における我々の交易は、ビルマ人や中国人商人のそれとほぼ同じ立場に立つことができた (Crawford 1834: II: Appendix No. 2: Envoy's Report of the Mission, to George Swinton, Esq., Secretary to Government: 13)。

と述べており、18世紀より課題であった貿易障壁の撤廃により貿易がさらに拡大することを期待している。しかし、条約という概念がもともとビルマには存在せず国王による恩恵というような位置づけであったため、こうした取り決めは必ずしも有効に働かず貿易をめぐる摩擦はしばしば発生し、後の第2次、第3次英緬戦争へとつながっていくことになる。

以上、18世紀から19世紀前半までの海上貿易の変遷についてみてきたが、1790年代以降大きく貿易量は拡大し、特に1811年以降その拡大の幅は急増していることがわかった。商品の構成についても、輸出は、従来のラック、カテキューなどビルマの特産に加えて造船材としてのチ

ークの需要が高まり、さらに、造船、船隻の輸出がビルマ貿易で得た利益の持ち出しの手段として注目を浴びるようになったのがこの時期の特徴といえる。輸入品は、17世紀以来のインド製綿布が中心を占める状況は大きく変化することはなかったが、1810年代の終わり頃から、インド製綿布に代わってイギリス製の綿布の需要が高まっていったことが注目に値する。こうし

た変化にともない、貿易に従事していた商人の活動やその構成にも当然変化が見られたことが考えられる。また、貿易やビルマ政府との間にいた様々な媒介者、代理人たちの構成にも変化が見られたことが想定されるが、こうした介在者、渡海者たちの存在と変容については、今回の考察ではあまり触れることができなかった。次の機会に論じることとしたい。

参考文献

一次史料

Cox, Hiram, 1821, *Journal of A Residence in the Burmhan Empire, and more particularly at the Court of Amarapoorah*, London.

Crawfurd, John, 1834 (2nd ed.1829), *Journal of an Embassy from the Governor General of India to the Court of Ava*, London.

Dalrymple, Alexander, 1926, *Reprint from Dalrymple's Oriental Repertory, 1791-7 of Portions relating to Burma*, Rangoon.

Letter concerning the Negrais Expedition; and concerning the adjacent Countries (23rd June, 1759) (pp.97-128)

Captain George Baker's Observations at Persaim and in the Journey to Ava and Back in 1755 (pp.133-142)

Captain George Baker's Journal of a Joint Embassy to the King of the Bûraghmahns [Burmans] (pp. 143-162)

Ensign Robert Lester's Proceedings on an

Embassy to the King of Ava, Pegu, &c. (pp. 203-222)

Alves, Walter. "Account of the Settlement at Negrais, being cut off." [Dated 22 November 1760]. (pp. 343-393)

Francklin, William, 1811, *Tracts, Political, Geographical, and Commercial; on the Dominions of Ava, and the North Western Parts of Hindostaun*, London.

Gouger, Henry, 1860, *Personal Narrative of Two Years' Imprisonment in Burmah*, London.

Great Britain, 1825, *Papers relating to East India Affairs: viz., Discussions with the Burmese Government*, London.

Hall, D. G. E. (ed.), 1955, *Michael Symes, Journal of his Second Embassy to the Court of Ava in 1802*, London.

Hamilton, Alexander, 1744 (1727), *A New Account of the East Indies: Giving an exact and copious description of the situation, product, manufactures, laws, customs, religion, trade,*

- &c. of all the countries and islands, which lie between the Cape of Good Hope, and the island of Japon, vol.2, London: Printed for C. Hitch: A. Millar.
- Hunter, W. M. D., 1785, *A Concise Account of the Kingdom of Pegu*, Calcutta.
- KBZ: U Maung Maung Tin, 1967-68, *Konbaungzet Mahayazawindawgyi*, 3vols, Yangon.
- Prinsep, George Alexandre, 1971, "Remarks on the External Commerce and Exchanges of Bengal, with Appendix of Accounts and Estimates (1823)," in K. N. Chaudhuri (ed.), *The Economic Development of India under the East India Company, 1814-58: A Selection of Contemporary Writings*, Cambridge Univ. Press: 51-167.
- Sangermano, Father Vincenzo, 1995 (1893), *The Burmese Empire: A Hundred Years Ago*, Bangkok: White Orchid Press.
- Symes, Michael, 1995 (1800), *Account of an Embassy to the Kingdom of Ava, sent by the Governor-General of India in the Year 1795*, New Delhi: AES.
- Wilson, Horace Hayman (comp. & ed.), 1827, *Documents illustrative of the Burmese War with an Introductory Sketch of the Events of the War*, Calcutta: Government Gazette Press.
- 研究
- Desai, W. S., 1931, *History of the British Residency in Burma 1826-40*, Rangoon.
- Dijk, Wil O, 2006, *Seventeenth-century Burma and the Dutch East India Company, 1634-1680*, Singapore University Press.
- Hall, D. G. E., 1945, *Europe and Burma: A Study of European Relations with Burma to the Annexation of Thibaw's Kingdom, 1886*, London: Oxford University Press.
- Hall, D. G. E., 1960 (3rd ed. 1950), *Burma*, London: Hutchinson.
- Hall, D. G. E., 1968 (2nd ed., 1931), *Early English Intercourse with Burma, 1587-1743, with The Tragedy of Negrais as a New Appendix*, London: Cass.
- 岩城高広 2001 「コンバウン朝ビルマの成立」桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史4：東南アジア近世国家群の展開』（岩波書店）：265-286.
- Khan, M. Siddig, 1957, "Captain George Sorrel's Mission to the Court of Amarapura 1793-94: An Episode in Anglo-Burmese Relations," *Journal of Asiatic Society of Pakistan*, II: 131-153.
- Kitzan, Loureance, 1975, "Lord Amherst and the Declaration of War on Burma, 1824," *Journal of Asian History*, IX-2: 101-127.
- Kitzan, Loureance, 1977, "Lord Amherst and Pegu: the Annexation Issue, 1824-1826," *JSEAS*, VIII-2: 176-194.
- Lieberman, Victor B., 1984, *Burmese Administrative Cycles: Anarchy and Conquest, c. 1580-1760*, Princeton University Press.
- 荻原弘明 1982, 86 「英国東印度会社ビルマ商館開設に就いて--十七世紀ビルマ貿易一般、2」『鹿児島大学史学科報告』31:1-97、33:1-16.
- Owen, Sidney J., 1886, "Joseph François Dupleix,"

English Historical Review 1 (4): 699–733.

Ramachandra, G.P., 1977, “Anglo-Burmese Relations, 1795-1826.” Ph.D. diss., University of Hull.

Ramachandra, G. P., 1978, “The Outbreak of the First Anglo-Burmese War,” *JMBRAS*, 51-2: 69-99.

Ramachandra, G. P., 1979, “The Canning Mission to Burma of 1809/10,” *JSEAS*, 10-1: 119-138.

渡辺佳成、2001 「コンバウン朝ビルマと「近代」世界」 齋藤照子編『岩波講座東南アジア史 5：東南アジア世界の再編』（岩波書店）：129-160.

渡辺佳成、2003 「18-19 世紀イギリスにとってのビルマ」『文化共生学研究』1: 153-168.

渡辺佳成、2008 「第一次イギリス＝ビルマ戦争」「第二次イギリス＝ビルマ戦争」「第三

次イギリス＝ビルマ戦争」歴史学研究会編『世界史史料 9：帝国主義と各地の抵抗 II』（岩波書店）：323-329.

渡邊佳成、2018 「綿花の道～エーヤーワディー川が結ぶベンガル湾・ビルマ・雲南」 弘末雅士編『海と陸の織りなす世界史：港市と内陸社会』（春風社）：69-93.

Woodman, Dorothy, 1962, *The Making of Burma*, London.

Yule, Henry & A.C. Burnell, 1994 (1903), *Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive*, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

